



ISSN 1884-7722

ちひろ美術館・東京  
美術館だより

No.194

2016.7.28

## Kawaii・ちひろ展

●2016年8月11日(木・祝)～11月6日(日)

「かわいい」という言葉は今や日本文化を形容するキーワードのひとつkawaiiとなって外国にも広まり、これを切り口にした美術展や書籍も近年多くみられるようになりました。本展では、再度いわずに「かわいい」をいくつかの視点から解明し、その魅力に迫ります。

### ちいさきものはみなうつくし

「枕草子」のなかで、清少納言が「なにもなもの、ちいさきものは、みなうつくし。」と書いたように、古来より日本では小さいものを、愛でてきました。ちひろは、子どものほかにも虫たちや小鳥、犬や猫、草花など身近な小さなものに心を寄せて描きました(図1)。

### 子どものかわいらしさ

「あの手のかわいらしさなんて、握られただけでもどうしようもないほどかわいいでしょう。」と語ったちひろは、あ

かちゃんや子どもたちの手や指の動き、ふとしたときに見せる表情などもしっかりと観察してとらえています。(図2)

『あかちゃんのくるひ』は、生まれたばかりの弟を迎える不安と期待でゆれる少女の気持ちを表現した絵本です。少女が、ぬいぐるみのくまを取ろうと、小さな手をのばすようにいじらしさが感じられます(図3)。

### なつかしい情景

「なつかしい」ということばは、「かわいい」という意味で使われたこともあるそうです。子どもたちが遊ぶ情景を見たとき、人は自分の小さかったころを思い出し、なんともいえない、あたたかい気持ちを見出すのではないのでしょうか。多くの子どもたちが登場するこの絵には、そのようなノスタルジックな雰囲気があふれています(図4)。

### ふしぎかわいい

恐ろしく、不思議な物語の登場人物たちも、ちひろの手にかかると、どこかユーモラスなかわいらしさが感じられます。『にじのみずうみ』の魔法使いの描写は場面ごとに異なりますが、ここでは、やわらかな輪郭とつぶらな瞳に、どこか愛嬌が感じられます。(図5)

### かわいいものを守る

ちひろは戦争をテーマにした本を3冊手がけ、直接的な苦しみや悲惨さではなく、どんな状況にあってもかわいい子どもたちを描きました(図6)。「平和で豊かで美しく、可愛いものがほんとうに好きで、そういうものをこわしていこうとする力に限りない憤りを感じます。」と語ったように、「かわいい」を大切にしたいというちひろの気持ちは平和への希求につながります。(松方路子)

## 〈企画展〉あべ弘士の動物王国展

●2016年8月11日(木・祝)～11月6日(日)

旭山動物園の飼育員として、25年間勤めた異色の経歴を持つ画家あべ弘士は、退職後、野生動物を取材するため、世界各地を訪れています。その作品には、雄大な自然や動物本来の姿に接するなかで生まれた感動が、ユーモアあふれる独創的な視点を持って描き出されています。

本展では、「あらしのよるに」動物園「アフリカ」「北極」「地球」「絵本ねぶた」をテーマに、初期から近作までの絵本や立体作品などを多数紹介し、動物画家あべ弘士の魅力の全貌を紹介します。

### 動物園の動物たち

23歳のとき、地元・旭山動物園の飼育員となったあべは、当時、同僚と「動物園とはなんぞや」と、環境・展示・繁殖について熱く語り合い、現在の行動展示\*を実現させた立役者の一人となりました。

『雪の上のどうぶつえん』(図1)は、飼育員をしながら画家としての活動も始めたあべが、1冊の絵本として制作を依頼された最初の仕事でした。大雪の日、夜勤中の園内で見つけたなぞの足跡を追っていくと、プールから逃げ出したアザラシに遭遇するという、実際に起きた出来事をもとに創作されました。風景や動物は水彩による大胆なタッチで、人物はペンによる細かな線描で描くなど、変化に富んだ表現がこの時代の特徴です。実体験をもとに、さまざまな技法を

駆使して描いたこの作品からは、画家が園の動物たちに寄せた愛情と、初めての絵本創作に注いだ情熱が感じられます。

### 『あらしのよるに』

1994年、あべは『あらしのよるに』(木村裕一作・図2)に絵を描く仕事を依頼されます。オオカミとヤギの種を超えた友情をテーマにした本作は、画材や画風を大きく変えながら、本編7巻と番外編1巻のシリーズが出版されました。

第1巻を制作する際、送られてきた原稿を手にしたあべは、「2枚目、3枚目と読み進めながら、頭の中でどんどん描き始めていた」と語っています。この作品では、画面を分割し、「芝居形式で対話のイメージを重視した」構成や、ペンで描いた線描をコピー機で白黒反転し、マーカーで着色するなど、頭のなかに浮かんだ絵を具現化するために、工夫を凝らして描いています。独学で絵を学んだあべの自由な発想が、新たな表現へと結びついた作品となりました。

今回の展示では、ダンボールで作った約100体のオオカミたちが、仲間を捨て、逃避行するオオカミのガブとヤギのメイを追いかけながら展示室へと誘導します。

### 絵本ねぶた

「ねぶた」は、青森県津軽地方に伝わる伝統的な祭りです。祖父の故郷・青森県黒石市を訪れた際、ねぶたの絵を描いて

みたいと思ったあべは、弘前市の方々の協力を得て、その願いを実現しました。

弘前のねぶたは、「扇ねぶた」と呼ばれ、巨大な扇型の和紙に墨汁で線画を描き、ロウで縁取りした後、50色の染料で彩色し、表側の「鏡絵」と裏側の「送り絵」の2枚を描きます。それを立体的に組んで山車に乗せ、市内を練り歩きます。

2004年、あべは、金剛山最勝院(弘前市)の本堂に5日間こもり、トラが尾を翻す鏡絵(図7)と、クジラやアザラシが舞い泳ぐ送り絵を完成させました。その後も3回、ライオンやフクロウなど、動物をテーマにした鏡絵・送り絵を制作しています。力強い線と鮮やかな色彩を用いて描かれた作品のなかで、動物たちはいのちの輝きを響かせ合っています。

本展では、この扇ねぶたをライトアップして展示します。暗闇のなか、幻想的な輝きを放つ作品には、画家の遠い故郷への恩返し思いも込められています。

「心が震えるような感動は、(中略)記憶のなかにちゃんと蓄積されていくんだ。そしてその感動の積み重ねが絵心をかきたてて、数年後に絵本になったりする」と語るあべ弘士。そのすべての作品には、特異な経験を重ねるなかで生まれた感動を昇華させながら、画家がとらえた動物たちの生命力や存在そのものが映し出されています。(中倉恵美子)





図1 花のなかにすわる少女と小鳥たち  
1960年代中頃



図2 ざるそばと少女 1970年頃



図3 くまのぬいぐるみに手をのぼす少女  
『あかちゃんのくるひ』(至光社)より 1969年



図4 はないちもめ 1958年



図5 虹を切る魔法使い  
『にじのみずうみ』(偕成社)より 1970年



図6 ヤシの木にのぼる男子  
『母さんはおるす』(新日本出版社)より 1972年

〈企画展〉あべ弘士の動物王国展



図1 『雪の上のどうぶつえん』(福音館書店)より 1989年



図3 ゴリラ 2008年 居酒屋「独酌三四郎」蔵(部分)



図5 トラ『どうぶつ友情辞典』  
(クレヨンハウス)より 2004年



図2 『あらしのよるに』(講談社)より 1994年



図4 クマ「飛ぶ教室」(光村図書出版)表紙 2007年



図6 『ライオンのよいいちにち』(佼成出版社)より 2001年



図7 絵本ねぶた 2004-2009年(安曇野ちひろ美術館展示風景)



## 2016年7月3日(日) 担当編集者が語る村上春樹の作品とイラストレーション

「村上春樹とイラストレーター」展に合わせ、村上春樹さんの担当編集者を30年近くつとめ、今も多くの村上作品に関わっている新潮社の寺島哲也さんに村上作品の装幀について語っていただきました。その一部を紹介します。(原島恵)

## 「村上春樹」との出会い

僕は1979年、村上さんのデビュー作『風の歌を聴け』が出版された年に新潮社に入社しました。この小説を読んだときの瑞々しい感覚は今もよく覚えています。窓がぱっと開いて、新しい空気が流れこんだみたいだに思えて、何度も読み返しました。著者自身が描いたTシャツの絵があつたり、章を表す数字が書き文字タッチで入っていたり、他の本にはないビジュアルの要素もとても新鮮でした。

村上さんに初めて会ったのは1984年の冬です。雑誌への寄稿を依頼する電話がつながったそのとき、「すみません。今、スパゲティを茹でているので、もう少し後にしてくれますか」って、『ねじまき鳥クロニクル』にもスパゲティを茹でるシーンが出てきます。IQ84年、Qの世界の出来事だったのかもしれませんが(笑)。

村上さんは仕事や人生のスタイル、ファッションなど自由でカジュアルですが、譲れないものは絶対に譲らない、ぶれないという点で一本筋が通っています。

## 最初に編集担当した本は……

最初に担当したのは、C.D.B. プライアンの『偉大なるデスリフ』(1987年)という翻訳小説です。1987年9月には、『ノルウェイの森』が出版されていますね。

この小説は、画家ラウル・デュフィがデザ

インした壁紙をカバーに使い、なかの表紙もカラーで印刷されているお洒落な本です。デザインは新潮社装幀室の高橋千裕さん。『ねじまき鳥クロニクル』や『IQ84』、短編集、エッセイまで、装幀をずっと一緒に考えてきた仲間です。同僚の松家仁之君(現在、作家・編集者)はNYでブライアン氏からこんなメッセージをもらって来てくれました。

「ジョン・チーヴァーは、編集者とは作家の喉にナイフをつきつけるような存在だと言うけれど、僕の場合はどうやら違ったらしい。本当にありがとう」

装幀をととても気に入ってもらえて、本当に嬉しかったですね。

ジャズ・ベーシストのビル・クロウ『さよならバードランド』『ジャズ・アネクドーツ』(いずれも村上春樹訳)、装幀は和田誠さん。刊行後、お二人と会食をしました。表参道のギャラリーで開かれていた和田さんの個展に話が及んだときのことです。「和田さんがお描きになってるジャズ・ミュージシャンの絵、すごくいいですね。あの絵に文章を書いてもいいですか?」「春樹さん、見てくれてたんだ」

和田さんと村上さんはその話で盛り上がり、「じゃあ、芸術新潮で連載しましょう」と僕がいつて出来上がったのが『ポートレート・イン・ジャズ』です。編集者が「仕事」をした瞬間でしょうか……(笑)。

もう1冊、『セロニアス・モンクのいた風景』(村上春樹編訳)にも「物語」があります。装幀をお願いする予定だった安西水丸さんが亡くなられ、和田さんがその思いを引き継いで下さいました。安西さんにはNYのジャズ・クラブでモ

ンクに日本の煙草「ハイライト」を一本上げたという逸話があります。Hi-liteのパッケージ・デザインは和田誠さん。まさにその情景を描いたのが、この装幀のモチーフです。カバー裏には煙草をくわえて演奏するモンクの後ろ姿を描いた水丸さんの絵があしらわれ、村上さんが心温まるあとがきを書いています。

## 物語はいつも装幀から始まる。

単行本は「花ざれ」(背の上下にある飾り布)や、「スピン」(しおり)の色、各章のタイトル、文字や行数、字体、本の開きや紙の種類など考え抜かれてつくられます。装幀とは書店で目立つためだけのものではなく、作品世界の入口であり、案内役であり、全体を表す存在です。村上さんは、文章だけでなく、本全体のつくりやタイトル、文字や色などビジュアルでも非常にセンスがいいんです。

『村上春樹 雑文集』などのエッセイでは目次の並びにも妙があります。村上さんは極めてすぐれた「編集者」も内蔵していて、三ツ星シェフが最高のメニューを考えるように、目次の並びも絶妙に考えて構成しています。これを意識して読んでいただくと、きっと楽しみは倍増すると思います。

一昨年、蜷川幸雄さんにほれ込んできた英国演劇界の名プロデューサー(元女優)、セルマ・ホルトさんにお目にかかりました。

## “We should serve the genius.”

「私たちの仕事は才能ある人に尽くすこと。そういう場所にいるのです」。納得できる言葉でした。創造の現場近くにいる僕たち編集者の実感、文学の魅力、装幀を通して感じていただければ嬉しいです。

## 5月27日(金)～6月3日(金)

## ちひろを訪ねるデンマークの旅

アンデルセン童話を毎年のように描いてきたちひろが、彼の故国デンマークを旅してから50年目の今年、ちひろの足跡をたどり、アンデルセンゆかりの地を巡るツアーが催されました。この旅を2回に分けてご報告します。

アンデルセンが生まれ育った街オーデンセをちひろが訪ねたのは、1966年3月30日のことです。パリやローマなどヨーロッパ各地を1か月余りかけて巡るツアーに母と共に参加していたちひろは、念願のオーデンセに行くために、母とふたりで別行動をしました。ちひろたちはコペンハーゲン中央駅から汽車と連絡船を乗り継いでフュン島のオーデンセ駅まで行きましたが、今は海を越えて鉄道がつながり、1時間30分程で行くことができます。ちひろがまず訪れたアンデルセン博物館は、当時よりも建物が広くなり、

彼の人生や19世紀の時代背景などが充実した資料で紹介されています。160言語で翻訳されているという各国語版の本のなかに、ちひろ本人が寄贈したと思しき初版の『おはなしアンデルセン』もありました。博物館の一部となっているアンデルセンの生家は、古くからの街並みの保護地域のなかにあります(図参照)。母娘が長い時間を過ごしたレストラン Under Lindetræet(菩提樹の下)は今も生家の前にあって、ちひろのスケッチに描かれていた薪ストーブがそのままに置かれていました。

他にも、アンデルセンが2歳から14歳まで暮らした貧しい靴屋の家や、母親が洗濯婦として働いたオーデンセ川の洗濯場、堅信札を受けた聖クヌート教会、名

誉市民として称えられた市庁舎等、オーデンセにはアンデルセンゆかりの場所が数多く残っています。貧しくても夢と向上心を失わずに運命を切り開いたアンデルセンその人と、彼の童話の世界が、今もリアリティを持って感じられる街でした。ちひろが滞在したのは7時間程の短い時間でしたが、ここで10枚ものスケッチを描き、「じかにこの目で見、ふれることのできる感動がどんなにわたくしを力強く仕事に立ち向かっていけるようになるか」をかみしめたといえます。(上島史子)



オーデンセ アンデルセンの家 1966年

現在のアンデルセンの生まれた家

\*アンデルセン博物館は隈研吾氏の設計により、2020年にリニューアルされました。

## ひとこと ふたこと みこと



4月30日(土) ☁

東京に来ることがあったら、ちひろ美術館に、と思っていました。すごい!娘が小さいころの姿…、写真にはとらえられていない動きや表情。ポワンと心の片隅に残っている記憶が、ちひろさんのどの絵にもあらわされていました。来てみて本当に良かった、ありがとう。

5月1日(日) ☀

20数年ぶりに来ました。前は結婚前の奥さんと「次は子どもを連れて来たいね」と。今回は子どもたちを連れて来ました。ふたりは高3と中2。残念ながら奥さんはもういっしょに来れなくなりました。でもここに来たらいっしょに見た記憶がよみがえります。もっと早く来れば良かった。ちひろさんによろしく、奥さん。(野村)

5月14日(土) ☀

17歳で専門職についたとき、初ボーナスで買ったのが、大好きなちひろさんの全集でした。この机に飾ってある「母の日」、展覧会で初めて見たとき、泣いてしまいました。「絵」という表現だけではもったいないほどのドラマが、ちひろさんの絵のそれぞれにあると思います。(名古屋屋 LICCA)

6月17日(金) ☁

子どもたちが小さいころ、子育てに疲れ、本屋さんで偶然目にしたちひろさんの画集。あのときのちひろさんの絵の大きな愛情がなければ、今の子どもたちの楽しそうな毎日があっただろうか、20年たってしみじみと思いました。今日は私の人生の新しい一歩になるような気がします。(Sakai)

【はしれ、トト!展より】

5月10日(火) ☁

エネルギーのなかにシュールさがあるって楽しかったです。人間観察っておもしろいですね。(ゆみこ)

5月22日(日) ☁

いわさきちひろとは真逆の世界を描いている。それでもこれだけの人々を引き付けるのは、描かれている世界がいきいきとしているからだろう。今後どういった絵本をつくり出していか楽しみ。(まちお)

【村上春樹とイラストレーター展より】

5月26日(木) ☁

村上春樹さんが好きで、初めてこちらへうかがいました。ちひろさんの絵をゆっくりと、たくさん見るのは初めてでした。これからの人生で大切にしていきたいものがわかりました。(いのうえゆみ)

## 美術館 日記



5月22日(日) ☀

『はしれ、トト!』<sup>チョンヨン</sup> 초은영の絵本づくり展 最終日は、目に緑がまぶしい快晴の真夏日。競馬場に集う人のさまざまな表情や、走る馬たちの躍動感ある作品とも今日でお別れかと思うとさみしい。

5月25日(水) ☁

「村上春樹とイラストレーター」展示初日、開館前から門の前で待つ人がちらほら。台湾から訪れたカップルを含む村上春樹さんのファンだけでなく、佐々木マキさん、大橋歩さん、和田誠さん、安西水丸さん、それぞれのファンも続々と来館、じっくりと原画に見入る。昼のNHKニュースでも展示が紹介され、活気ある初日となった。

5月29日(日) ☀

原爆を投下した国の大統領が広島を訪問し、核廃絶への願いをこめ

た演説をしたことも記憶に新しい本日。第五福竜丸展示館開館40周年の集いにちひろ美術館からもスタッフが出席。原爆の1000倍の威力を持つ水爆のプラボー実験により、第五福竜丸を含む数百隻の漁船乗組員とマーシャル諸島の人々が被曝した悲劇を思うと、ちひろも望んだ平和な世界の実現のため、いま、私たちにできることは何だろうか、とあらためて思う。

6月11日(土) ☁

5月28日のスライドトークに続き、村上春樹ファンの聖地としても知られるブックカフェ6次元の店主ナカムラクニオさんを講師に迎え、村上春樹読書会を開催。村上作品はまだ1冊しか読んでいないという方から、村上さんの本はデビュー時からすべて読んでいるという方まで、それぞれの楽しみ

方で、作品の魅力を語り合った。

6月25日(土) ☁

今年初めての「いわさきちひろ〜27歳の旅立ち」上映会を開催。20代から60代まで、幅広い年代の方に参加いただいた。「ちひろさんの激動の人生を初めて知り圧倒された」「これからは絵の見え方が変わると思う」という感想も。

7月3日(日) ☀

昨日のJ-WAVE RadioDONUTSに続き、今朝のNHK日曜美術館で展示が紹介されたこともあってか、気温37度を超える真夏のような暑さのなか、今年に入って最も多い数のお客様をお迎えした。午後には、新潮社の村上春樹担当編集者・寺島哲也さんによるトークイベントも開催され(活動報告参照)、外の気温に劣らず、館内にも熱気があふれた一日となった。

## 窓

### 「可愛い」と「かわいい」「カワイイ」、そして「Kawaii」

竹迫祐子(公財)いわさきちひろ記念事業団事務局長

今日、アジアのみならず、世界を席巻しているKawaii。さまざま視点から「かわいい」研究が取り組まれています。四方田犬彦の『「かわいい」論』(ちくま文庫)もそのひとつ。比較文化論の視点から、清少納言、太宰治から、「セーラームーン」に至るまで、日本と海外の「かわいい」現象や来歴、大学生の男女や世代の異なる女性にとっての「かわいい」比較。秋葉原や池袋の「かわいい」の聖地にも触れつつ、物、商品としての「かわいい」戦略等、対象を幅広くとらえて興味深いものがあります。

日本発祥の「かわいい」嗜好の根底に、清少納言が残した「小さきものは、皆うつ

くし」という感覚があることは間違いないでしょう。幼く小さく儂いもの(命)を慈しむ思いは、平和で穏やかなイメージに繋がります。確かに、幼い子どもが健気にしている姿に、大人の多くは心動かされます。であるが故に、大東亜戦争の時代に、「天皇陛下に仕える皇国民」として生きること=死ぬことを教育された「少国民」は、大人の国民服を小さくした少国民服を着て健気に行進して大人にとっての「かわいい」を喚起し、さらなる奮起を促しました。

他方、「かわいい女」とか「かわいい年寄り」であることが期待される風潮も日本にはあります。四方田は、社会学者

上野千鶴子の「老いる準備」(学陽書房)から、「子供や孫に面倒を見てもらうために「かわいい」老人であることが推奨されている今日の日本社会の在り方に、疑問を呈している」という指摘を引用しています。それは、庇護者や為政者が被庇護者に求める「かわいい」を装った盲目的な従順があるという指摘でしょう。

それらを考えると、かわいい年寄りにもかわいい国民にもなりたくありません。多くの方がかわいいと感じる無垢な赤ちゃんとともに、幼いなりに意志を持った少女を描いた画家いわさきちひろ。その「かわいい」の独自性が、今、際立ってきます。

●次回展示予定 2016年11月9日(水)～2017年1月15日(日)

ちひろ・冬のしつらえ



いわさきちひろ 白いマフラーをした緑の帽子の少女 1971年

日々の暮らしを慈しんでいたちひろの絵のなかには、装いや季節の行事、室内の調度など、冬支度が細やかに描かれています。本展では、秋から冬の子どもたちを描いた作品をはじめ、黒姫山荘でのくらしぶりを思わせる作品や、絵本『ゆきのひのたんじょうび』の原画などを展示します。

赤羽末吉・中国とモンゴルの大地



赤羽末吉『スーホの白い馬』(福音館書店)表紙 1967年

22歳からの15年間に中国東北部(旧満州)で過ごした赤羽末吉。大陸の自然や伝統文化に魅せられた赤羽は、壮大なスケールを後の絵本制作に生かしました。赤羽の足跡をたどるとともに、『スーホの白い馬』『ほしになつたりゆうのきば』など中国やモンゴルの大地を舞台にした絵本を紹介します。

ちひろ美術館・東京イベント予定 <http://www.chihiro.jp/>

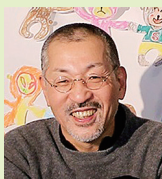
<https://www.facebook.com/chihiro.tokyo>

各イベントの予約・お問合わせは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。イベント参加費のほか、別途入館料が必要です(高校生以下は無料)。※イベント申し込みは、先着順です。また、参加費が記載されていないイベントは無料です。TEL.03-3995-0612 E-mail chihiro@gol.com

〈企画展関連イベント〉

●あべ弘士ギャラリートーク

あべ弘士さんが、展示室で作品について語ります。  
○日 時：8月11日(木・祝) 10:30～11:30  
\*参加自由・参加費無料



●あべ弘士講演会「旅と絵本と動物と」

動物園勤務時代のことや、アフリカや北極への旅のこと、絵本づくりのことなどをお話します。  
○日 時：8月11日(木・祝)  
12:30～14:00(講演会) 14:00～14:30サイン会(整理券配布)  
○定員：60名 要申し込み7月11日(月)受付開始  
○参加費：700円

●ドキュメンタリー映画

「いわさきちひろ 27歳の旅立ち」上映会

○日 時：9月10日(土) 16:00～18:00  
○定員：50名 要申し込み8月11日(木)受付開始

〈参加自由、無料のイベント〉

●松本猛ギャラリートーク

9月4日(日) 14:00～  
講師：松本猛(絵本学会会長・ちひろ美術館常任顧問)

●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日 14:00～

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日 11:00～

●「支援会員の日」開催決定

○日 時：11月27日(日) ※詳細は次号でお知らせします  
14:00～ギャラリートーク、15:00～2015年度報告会  
15:30～記念講演 海老名香葉子「平和への願い」  
○参加費：支援会員ご招待、一般1000円(入館料込)  
○定員：80名 要申し込み11月4日(金)受付開始



〈文化庁 平成28年度 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業〉

●夏休みギャラリートーク

「美術には興味がないけれど」「学校の宿題だから」と来館する小中学生の皆さん、ぜひ展示室でいっしょに作品を見てみましょう。  
○日 時：8月15日(月) 11:00～14:00～  
\*参加自由

●ちひろの水彩技法体験ワークショップ 「にじみのキーホルダー」

○日 時：8月28日(日) 10:30～15:30  
○対象：5歳～大人  
○定員：70名(先着順)  
当日申し込み 受付時間10:00～15:00  
○参加費：無料



●わらべうたあそび

○日 時：9月17日(土) 11:00～11:40  
○講師：服部雅子(西東京市もぐらの会代表、はとさん文庫主宰)  
○対象：0～2歳児と保護者  
○定員：15組30名 要申し込み8月17日(水)受付開始  
○参加費：無料

●親業講演会

「—今日から実践できる—子どもに気持ちが伝わる話し方」

○日 時：10月13日(木) 10:30～12:30  
○講師：田中満智子(親業訓練協会インストラクター)  
○定員：40名 要申し込み9月13日(火)受付開始  
○参加費：無料

〈開館情報〉

休館日：月曜日 ※祝休日(9/19、10/10)は開館、翌平日(9/20、10/11)休館。  
※8/15(月)は特別開館

CONTENTS Kawaii・ちひろ展／〈企画展〉あべ弘士の動物王国展…②③  
〈活動報告〉「村上春樹とイラストレーター」展示関連イベント／ちひろを訪ねるデンマークの旅…④  
ひとことふたことみこと／美術館日記／窓『「可愛い」と「かわいい」「カワイイ」、そして「kawaii」』…⑤